

## 上流には猛禽類

ファン・ジョンウン

(辻本武 訳)

私はずっと以前にジェヒと別れた。別れる時にどんな話を交わしたのか覚えていない。交わした話がほとんどなかったためかも知れない。その頃にはジェヒの家に行く用事があっても、中に入らないで家の前で用事を済ませるようになっていた。

ジェヒの名前は재희。재희ではなく어이。재희ではなく재희です。と。ジェヒには姉が四人いた。の母音を説明した。어이ではなく어이。재희ではなく재희です。と。ジェヒには姉が四人いた。末っ子で長男のジェヒであるが、世間でよくあるような男の子が欲しいからと産み続けた結果ではないようだ。ジェヒの母親が商売に忙しくて、子供を堕しに行く時間がなかったからだという。小中学校の時でも、ジェヒは息子として特別扱いされるとか、何か得をするということとはなかった。少なくとも私が聞いたところでは、姉たちと公平に食事をし、悪さをすれば公平に殴られた。

ジェヒは姉たちに似ていた。写真を見ればすぐに分かった。みんなの顔は直接見ると色々違っているのだが、写真の中では顔の輪郭が同じなのだ。それは物理的形態というよりは、ひよっとして雰囲気のようなものかも知れない。ジェヒは女性には親切だった。親切に振舞おうとして親切にしているのではなく、女性のことをよく理解しているから親切なのだと思える。姉たちの生き方を見ながら、間接的に経験した女性を内面化したと言えるようだった。ジェヒと一緒に街を歩くと、ボーイフレンドというよりは兄妹か、あるいは仲のいい姉妹のように感じる時が多く、私はそんな親密感が嬉しかった。

その年、ジェヒの父親は片方の肺を除去する手術を受けた。若い時に結核をちゃんと治療しなかったせいで弱っていた肺に、ガン細胞が広がっていたのだ。何でも父親は風邪で病院に行ったから、偶然にその事実が判明したという。ガンが発見された後、今度はジェヒが父親に付き添って病院に行き、手術をすることは出来るが望みは薄いという最終診断をもらった。この診断が下った晩に、ジェヒの姉たちは実家の板の間に集まった。そしてジェヒの母親とジェヒまで含めて全部で六人が円座に座って手を握り、この苦難な事態を克服しようと誓い合った。それはお祈りではあったが、一方的な頼みというものではなくお互いの誓いであり激励であった。ジェヒや姉たちには、神というものはいない。

私はちよつと離れた場所に座って彼らを見守った。ジェヒが自分で改造して部屋の壁に据え付

けた扇風機の下側に、大なり小なりの額が何枚か掛つていた。昔の写真と額。そして美しい女性。一番古い写真はジェヒの母親だった。白黒写真で、結婚直前の十代後半にその写真を撮つたのだ。オードリ・ヘップバーンスタイルで髪を巻き上げ、袖のないワンピースを着た彼女は、非常に洗練されて美しく見えた。目にも生気があり、表情が豊かだった。更に彼女の子供たち。彼らの幼い頃の写真だった。コスモスや百日紅の横に吊りズボンをはいて撮つた写真。昔の家の中庭で裸になつて水浴びをする瘦せた子供たち。写真のなかの子供たちがみんな今の板の間に集まつてゐる。逆境をともに耐え抜いて生き残つた人たちであつた。私の写真もいつかはあの壁に掛かることになるだろうと私は思った。そうなれば、写真の中に写つている私よりもずっと年取つた私、その写真の下に座る日も来るだろう。私はそれを疑わなかつた。ジェヒと私はずっと以前に出会い、お互いの家のことをよく知り合う仲だった。おそらく次の苦難の時には、私も彼らと手を握り合つてこの板の間に座ることになるだろう。ジェヒの母親の献花に取り囲まれながら、私たちは力を合わせてこの苦難に耐え抜こうと誓い合うのだ。それが当然だし自然なことだ。

ジェヒの父親は、夏が終わる頃に手術を受けた。五時間の手術で、予想よりも長かつた。手術を終えて現れた医者には疲れた姿を見せながらも、やつと終わつてほつとしたという声で結果を言つた。開いてみると、胸部が余りに汚れた状態だったので、膿と異物をきれいに取り出すのにそれだけ時間がかかつた、格別に難しい手術で、もう一度このような手術をしるといわれれば、自分分は辞退したいぐらいだ、と言つて笑つた。手術は取りあえず成功だ、と彼は言つた。

私は、ジェヒの両親が以前に市場で商売をしていたと聞いた。在来市場（昔からある市場）で果物を売り、かなりの規模の店で商売もうまくいき、市場の商人の中でも一番正直に生きてきたという。ジェヒの両親は周囲の商人たちと契（頼母子講）を作ってたくさんの現金を運用していたのだが、ある日、ジェヒの母親の紹介で契の会員になった女が契の金を持ち逃げした。ジェヒの母親とは姉妹のような間柄で、事件が起きてから分かったことは、市場のなかで信用があったジェヒの両親の名前で、幾人かの商人から相当な金額を借りていたのだった。すべてを合わせれば大金になった。それは本当にとんでもない大金だった。最初から金を盗んで逃げるつもりだったのだから、追いかけることも探し出すことも出来なかった。とジェヒの母親は言った。それらの悲惨な状況はジェヒの姉たちが覚えていた。昨日までは先輩・後輩と言いついていた商人たちがジェヒの店に押しかけて来て、果物の収納箱をひっくり返して果物を踏みつぶし、さらに当時高校生だった長女のところにまでやってきて、学校を止めてでも金を返せと要求したのだった。ジェヒが二歳の頃で、ジェヒの家は大きく傾き、その後は再起することが出来なかった。

、私らは相談するところもなかった。と、ジェヒの母親は語った。

、夫婦ともに失郷民（朝鮮戦争時に北から逃れてきた人）だったから、自分たちの苦しい状況を相談できるだけの縁故ある人がいなかった。そんな苦境に育ち盛りの子供だけで五人。私らは二つの道考えたのよ。一緒に生きるか、それとも一緒に死ぬかってね。

ジェヒの両親が最初に考えたのは後者だった。しかし、子供五人と自分たちを一度に「確実に」

殺す方法をなかなか思いつくことが出来ず、そうならば生きる道だと方向を変えた、とジェヒの母親は語った。父親は、事情が少しよくなる時まで、子供を施設に入れたらどうか、と言ったのだが、それは母親が反対した。どこかの養子にでもなつたらどうするの？

、生きていいのか死んでいいのか分からずに、永久に会えなくなつたら、どうするの？

、家族離別をまた体験するというの？

寝ている子供たちを横に置いて、ジェヒの両親は考え直し、今度は母親が、借金をそのままにして遠くへ逃げよう、と言った。これは父親が反対した。彼は、自分の間違いでもないことのために犯罪者と同じやり方で逃げるといふわけにはいかないし、そのように逃げる姿を見せて、子供たちに恥ずかしい親になりたくない、と言った。母親はその言葉に同意した。母親は私にここまで聞かせてやって尋ねるように言った。「それからどうしたと思う？」

二人は子供を育てながら借金を返そうと決心した。果物店と自宅を処分してから、部屋が一つの借家を借りて、そこからやり直しの人生を始めた。前とは同じではなかったが、少しずつ状況がよくなった、と母親は語った。娘たちもほとんど結婚させた。結婚相手もいい人たちだった。彼女には苦難の生活の中で子供五人が誰もぐれることなく、どうあろうとも一緒に我慢して育てたことで、諦めずに家族を維持したことに自負心をもっていた。彼女にとっては、世間で一番悪い女は自分の子供を捨てる女であった。

しかし私は、それは不道徳だと思った。

ジェヒの母親とは仲良くやっついて尊敬もしていたが、あの時点の両親の選択については不道德だという考えをしないわけにはいかなかった。両親二人は借金を全部返す前に老いてしまい、ジェヒの姉たちがその借金返済の役割を担うしかないのだから。長女は進学を諦めて駅で保稅衣類を売った。彼女は収入から元金と利子返済に充て、残りを生活費用に充てた。彼女が結婚してからは、二番目、三番目、四番目、そしてジェヒの順番だった。ジェヒの姉たちで誰も大学に進学せず、結婚した姉たちは、みんな似たり寄つたりの生活であった。

私は深く考えることがあつて、その度に厳しい心情になつた。両親はなぜ逃げなかつたのか。なぜ新しい所で再出発しようとしなかつたのか。子供たちに恥ずかしくない親になろうというの  
は、自分たちの欲にしか過ぎないと考えなかつたのか。自分たちの良心と道徳に従つたのかも知れないが、娘たちの人生を見ると、不道德な選択ではなかつたか。

私がとりとめもなくそんな話をすると、ジェヒはどうしようもないというように笑つた。まあ、そんな人間だつたということだよ。それにそのまま逃げて行つてたら、僕たち会うことも出来なかつたかもね。ジェヒはそのように言い、私もその通りだと思つた。ジェヒの両親が逃亡を決心したならば、ジェヒは私と同じ地域で暮らすことはなかつただろうし、高校の同窓である私たちはひよつとして接点がなかつたかも知れない。仕方なくそのように納得はしたが、当時のジェヒ一家のことを想像すると溜め息が出た。

ジェヒの父親が退院した日、ジェヒの姉たちはまた実家に集まった。ジェヒは姉たちとお金を集めて、患者が寝起きするのに便利な電気で動くベッドを買って、部屋に置いた。父親がその上に座ると、姉たちは、お父さん、抱いてあげます、と言って一回ずつ父親の頭を抱きしめた。父親の小さな頭が、今は父より大きくなつた娘たちの胸に一回ずつ埋もれる光景を私はじつと見ていた。私は自分の両親とそんな抱擁を一度もしたことがなかった。また両親が抱擁し合う姿も見ることがなかった。幼い時から両親と私は仲がよくなく、また父と母の間も仲が悪かった。私がジェヒの家を何回か出入りしながら、ある晩に憧れの気持ちと羨ましさで涙が出るほど妬んだのは、まさにその光景だった。そしてそれは、ひよつとしたら私がその家族たちから分けてもらえたかも知れなかった、ものであつた。

ジェヒの父親はその後、在宅で闘病生活をした。放射線治療をしなくてもいいというのは幸いだったが、手術の部位にしょっちゅう問題が発生した。肺を取り出した場所は、言葉通りに空っぽの状態、時間が経てば体の他の構成物がその隙間を埋めようとするのだが、その際に炎症が出てくる。だから膿が溜まらないように管理せねばならなかった。管理のために横腹に穴を開けて排水路の役割をする短い管を差し込んでおくと、再生してくる肉のためにその道がしばしば塞がり、完全に塞がると命に関わるという状態だった。担当医は、それは再生力があるということなのでいい兆候だという話をしたようだったが、炎症は頻繁に起きた。ジェヒの父親の横腹は天気、湿度、本人の気分鋭敏に反応し、二ヶ月に一度は再入院せねばならない状況になった。体

がむくみ、熱が出て、そうなると体の内部の状態を点検するために病院に行き、その度に入院して手術するのと変わらないやり方で検査した。治ったと思つたら体を開き、また治つたと思つたら開くの繰り返しだった。ジェヒの父親は段々と体が弱り痩せ細っていった。それよりも肩の痛みや関節炎がひどくて一日中世話をしている母親の疲労がもつと深刻になった。疲れ果てて鬱状態であるのが目で見て分かるほどで、話す言葉からも耳で聞いて分かった。その頃にジェヒの母親が父親に向かって放つ言葉は、そばで聞いていても身が縮むほどに荒つぽかった。

ジェヒがちよつと遠くに出かけよう提案したのは、そういう状況の中で、夏が終わる頃だった。樹木園に行こうとジェヒは言つた。

両親とテレビを見ていて樹木園が出てきたのだが、父親があんない所にハイキングで行つてみたいと言うと、母親が珍しくも私も行きたいと同調したというのだ。二人が今まで一緒に旅行に行つたことがないと知つたのも初めてだし、父親の方が先にどこかにハイキングに行きたいと言い出したのも初めてだとジェヒは言つた。ジェヒは樹木園を何ヶ所か調べて、首都圏からそんなに遠くなく、原始林がよく保存されている大型樹木園を選んだ。山林保護のために見学者を制限していて、事前予約をしなければ入場できない所だった。ジェヒはそこに連れて行つてやりたいので一緒に行かないかと尋ねてきた。私は行きましようかと答えた。私は樹木園に行つたことがなかったからである。



\*

九月の初旬だった。その年の夏は例年とは違う暑さだった。その時も残暑が厳しく、じっとしていても汗が流れ落ちた。ジェヒの母親はこの日のお出かけのために人絹製の服を一着買い、弁当を準備した。ジェヒが車のエンジンをかけて待っていると、何かよく分からない荷物が六個も出てきた。最後にその荷物を載せ、さらに荷物を運ぶカートを載せた後、樹木園に向かって出発した。樹木園までは道が混んでいなくても二時間はかかる距離だ。

自由路に入って速度を上げ始めた時、父親が身分証を忘れてきたと言いつ出した。最後にテーブルの上のどこかに置いておいたのだが、カバンに入れた記憶がないというのだった。予約した人数と名前の人だけが入場できる樹木園なので、入口で身分証の確認があるかも知れない。しかし、それを取りに帰ることが出来ない所まで来ていた。ジェヒの母親が父親の間抜けぶりをけなし、すると父親は自分が悪かったと言わずに怒り出した。彼は、誰かが身分証をテーブルに置き忘れてここまで来てしまったじゃないか、と言いつながら舌打ちをした。大丈夫でしょう、ハンドルを握っていたジェヒが、ここまで来た人間を追い返すことはないでしょう、と何度も慰めて、やつと事態がおさまった。ジェヒは昔の音楽が流れるラジオのチャンネルに合わせていた。時ならぬ猛暑注意報が出た日だった。エアコンの冷気が出ていても、ダッシュボードは直射日光を受けて熱く焼けていた。エアコンの吐き出す音がやかましくて冷気を抑えると、今度は息が出来なくな

った。

ジェヒと私は、目上の人たちのコンディションに神経をとがらせた。ジェヒの両親、特に母親は鋭敏で、浮かれて気分がいいと思つたら急に悪くなることの繰り返しであった。何でもない事や何気ない一言がきっかけになった。ジェヒの父親が、うるさくて神経に障るからエアコンを切るう、と言うと、母親は、この暑さにどうしろというのか、と反発した。父親は、そうか、と笑うと、それが笑うことなのか、なぜ可笑しくもないのに笑うのか、と真面目な顔をして言つた。ジェヒが上手く話題を変えて二人の間をなだめている間、私は助手席の端っこを手でぎゅつと掴んでいた。何か頑固で熱いものを膝の上に置いて座っている気分だった。大波を越えて進むように、下がつたと思うと上がり、また下がるを繰り返しつつ、はらはらしながら行く道中であつた。

ジェヒは日陰に車を止めようと駐車を二回まわつたが、いい場所が見つからなかつた。適当な木陰には、先に着いた車がすでに場所を取っていた。一点の影もない駐車場のど真ん中に車を止めて荷物を下ろすと、太陽は真上にあつた。正午だった。ジェヒの父親が後ろのからパナマ帽を取り出して頭にかぶつた。ジェヒの母親は木陰の方を眺めて立っていたが、額に飛び出す髪の毛で目の下が影になつていた。

ジェヒはトランクを開けたままカートに荷物を積んだ。料理の入つた重箱、スイカ半玉を入れたアイスボックス、巻いたゴザ二本と各種のピクニック用品が入つた紙袋、おやつを入れたリュ

ツクサククだった。六個の荷物は大きさも形もそれぞれ違うものだから、カートに積むのが簡単ではなかった。重箱は丸く、アイスボックスは下に行くほど小さくなる形で、水筒は細長く、巻いたゴザはもつと長く、どのように積んでもバランスが取れなかった。特にピクニック用品が入った紙袋は、下の方に置くとぺちゃんこになってバランスが崩れ、上に置けば荷物を固定するゴム紐の隙間からこぼれて地面に落ちた。そんなことを繰り返すと、もはや皺くちやの状態だった。私はもうくたびれてしまつて、後方に下がつて見ていた。ジェヒはそのカートを引張つて樹木園に入るつもりなのか。カートを引張つて行くのに便利な道ばかりではないのに、何を考へているのかと思つた。ハイキングに来たのに、これではハイキングなんて難しいようだ。一・二個置いて行つても関係ないと思うのだが、ジェヒの母親はみんな必要だと全部持つて入場することに意地を張つた。ジェヒは、日に焼けて熱くなつたコンクリート地面に膝をついて荷物を積んで下ろし、また積むを繰り返しながら、汗を流していた。ジェヒの父親はうちわを扇ぎながら、紐が短すぎるのではないか言つた。ジェヒはでこぼこと積み上げた荷物の上にゴム紐を引張ると、リング金具で足首に傷をした。太いゴム紐の端に鷲の爪のような金属リングが付いていたのだが、それにどこかに間違つて掛けていて、ぱつと外れてジェヒの左足の、しかも内側のくるぶしに当たつた。その時、石が割れたような音がした。ジェヒは足首をぎゅつと掴んで座り込んだまましばらく動けなかつた。くるぶしを掴む手の甲には血管が膨れて浮き上がつていた。大丈夫かと聞くと、ジェヒは大丈夫と答へて一・二回足をはたいした後、真つ直ぐ立つた。ジェヒの母親

が呆然とした目でジェヒを見つめた。

樹木園は予想していたよりも静かでひっそりしていた。

駐車場に車を置いて樹木園に入った人はどこに行っただろうか、人の気配がほとんどなかった。日陰を探してどこかに入って行ったのだらうと私は思った。身分証問題で入り口でやりあっていた時に、後ろで次の順番を待っていた若いカップルが腕を組んだまま私たちの前を歩いていた。この二人がシダ植物園の方に角を曲がって姿を消すと、ヒノキ並木の広い道に残ったのはジェヒ一家と私だけであった。

ジェヒは私の首にカメラをかけて、写真を撮ってくれと言った。両親が並んで歩いている時の自然な姿を、である。しかしそれは簡単なことではなかった。うちわを扇ぎながら歩く父親と林の木々を横目で見ながら歩く母親、二人の後ろでカートを引いてゆつくり歩くジェヒまで、全員が入るような写真を撮ろうとしたのだが、誰か一人はアングルの外にいるし、ジェヒの父親と母親はもともと離れて歩くので、その二人を一緒にアングルに入るチャンスは多くなかった。私はムクゲや低木の松、カエデの木といったところから何回も撮った。ジェヒはびっこを引きながら歩いていた。その後ろには奇妙な形の荷物を載せたカートがうまくバランスを取りながら引かれていた。ジェヒがふと立ち止まって空を見上げると、見ろよ、と言った。私はジェヒが何を見ろと言ったのが分からなかった。これだよ。私には見えないのだが、これを見ろと言うジェヒは

親指で空中を指し示した。

クモだった。

一匹のクモが、クモの糸の端で風に乗っていた。どこかの雲から下りて来たように見えた。足が透明で、背中にはきれいな空色の模様があるクモだった。ジェヒの母親がやって来ると、昔、避難する途中の道でこのようなクモを何匹か見た、と言った。彼女は慣れた手つきでクモを手の指に載せると、クモが手の甲の上を這い回った。クモをじつと見る顔にいたずらっ子の気持ちが滲み出ていた。彼女は時おりそのような顔をするのがあり、そんな時に私は彼女の子供時代を思いやった。一九三九年生まれの老婦人の子供時代。そんなはるか遠い昔の話が身近に感じる。彼女は子供の時に戦争を体験した。それまで暮らしていた家の荷物をまとめてどこか知らない所に避難する道で、家族を永久に失うこともあるし、すぐ横で爆弾が爆発して両親や兄弟の体がバラバラにもなる、そんな戦争のことだ。彼女は私に戦争中の話を聞かせてくれたことがあった。避難する時に生まれたばかりの末っ子を背中に負っていたが、一瞬の隙に両親とはぐれ、その後は再び会うことが出来なかった。赤ん坊の末っ子はその避難途中で死んだ。末っ子をくるんで背中に負っていたのだが、空襲が過ぎて残り火が燃える原っぱを歩いていたら、火の粉が飛んできたのか、おくるみの綿の中に広がった火に焼けて死んだという。赤ん坊が泣きじゃくつても仕方なくそのまま負ぶって歩いていたら、ふと背中が熱くなつて赤ん坊を下ろしておくるみを開けてみたら、真っ黒に焦げて死んでいた、と彼女は言った。私がその話を聞いた時に年数を数えてみ

ると、五〇余年前の話だった。それを一緒に聞いていたジエヒが、悲しかったね、と言うと、彼女は悲しかったとか忘れたとか言わずに、その時はそんな体験した人が多かった、と言った。

私はその話を聞いてから彼女の子供時代を想像するたびに、みんな燃えて残った白い灰の山に覆われた原っぱに立つ女の子を思い浮かべ、その女の子はなぜ六〇代初めの彼女の顔をしているのだった。私が知っている顔、あの老婦人の顔なのだ。彼女は戦争孤児で、ヘップバーンスタイルで髪を巻いた美しい女性だったが、今は五十肩で痛みを苦しめ、関節炎で足を震わしている老婦人だ。その長い間に、私も分からずジエヒも分らず、甚だしくは彼女自身すら分からない変化が彼女に起きていた。私はその長い時間を想像できなかつた。廃墟の中の女の子、流行のスタイルで格好良く自分を飾る美しい女性、腫れあがる関節のために大体いつもぶすつとした表情をしているジエヒの母親。一人の女性が、まるで違う人のように変化したのだった。六〇年間だ。半世紀以上の時間。クモが彼女の腕を這い上がっていった。太陽は道の上にあるものを全て溶かしてしまいうくらいに、さらに暑くなっていた。私は汗が染みついた手でカメラを持ち、クモを見ている彼女を取った。クモは次に風に乗ってどこかに飛んでいった。

「おい、お前。」

ジエヒの父親が道の前の方で自分の横腹を見ながら立ち、言った。

「俺、漏れそうだ。ちよつと見てくれ。」

## ジェヒの父親。

ジェヒの姉たちが言うには、彼は校長になるべき人だったし、少なくとも学者とか先生になるべき人だった。彼は勤勉で、与えられた仕事を必要以上に几帳面に処理し、時間がかかる仕事もちゃんとやり遂げるタイプだった。保守政党をずっと支持し、政治を語る機会があると、ちよつと興奮しながら保守の新聞に出てくる言葉で語り、日記を書き、新聞をスクラップし、リサイクル品を器用な手つきで仕分け、夜には枕元に古いトランジスターラジオをつけておいて寝た。トランジスターラジオは、昔彼が借金の一部でも返そうと日本に渡り、不法滞在しながら働いていた時の生活用品であった。彼はそのラジオのスイッチを入れ、布団に入っても寝入ることなく、目を開けたまま横になつてゐるのだが、彼がそのように寝転がりながら何を考へてゐるのか誰も聞いたことがないし、彼が自分で言うこともなかつたので、結局は誰も知らなかつた。いつだつたか、私はジェヒに父親の日本生活について尋ねたことがあつた。ジェヒはちよつと考え込んでから、自分は何も知らない、と答へた。父親に聞いたことがないのか、と尋ねると、ない、と答へた。気にかかつたことはないのか、と更に尋ねると、そうだ、気にかかつたこともなかつた、と答へ、そんなことを聞くのが変だという表情で首を傾げた。ジェヒの父親は一年ほど日本に滞在して、その間に稼いだ円を体の隅々に隠して戻つて来た。空港の入国ゲートに立つた父を見た時、たった一年の間に老けて瘦せて衰弱した姿に姉たちと母が大きなショックを受けた、とジェヒは言つた。髪の毛がほとんど消えてなくなり、母が鶏の足を釜で茹でて食べさせるなどの

努力をしてから、ようやくある程度以前の姿になった、とジェヒは付け加えた。ジェヒは、その時子供だったが、母親が鶏の足を買いに行くのについて行った、と言った。母が市場の顔見知りの人と出会うのが嫌だとバスに乗り、行って来た道を今でも思い出す、とジェヒは言った。ジェヒの父親はその煮込み汁を飲んでだんだんと回復したが、頭のとっぺんには当時の痕跡がぼっかりと残っていた。

彼は小柄で情の深い老人だった。片方の肺を失ってからはベッドの上でじつと寝ていることが多くなつたが、起きていると相変わらず器用な手つきでリサイクル品を仕分けし、新聞をスクラップし、孫たちとよく遊んでやつた。このごろは耳が遠くなつたのか、何か尋ねると突飛な声を出す、とジェヒの母親は不平をならした。

「お父さんにそんなこと、あまり言わないでよ。」

ジェヒが穏やかな調子で言った。

「体が不自由な人にそんなことを言っていたら、酷いんじゃないの。」

母親とジェヒ、そして私がベンチに座っていた。後ろの方に大きな銀杏の木が立っていて、その影で周囲の気温が何度ぐらいか涼しかった。汗に濡れたガーゼを交換し、消毒も兼ねて父親について男性用トイレに入り、それから出てきた母親は火照った顔をしていた。赤くなり皺が寄っている首に汗が流れ落ちた。ジェヒの父親はトイレから出てくると、岩の隙間に設置された水飲み場を見つけ、水を飲んだ。彼は水道栓に口を当ててしばらく飲んだ後、タオルに水を濡らして



赤く火照った首と腕を拭った。母親は彼をぼうつと見て、そして言った。

「さあ。うちもそういう言葉が思わず出るんで、どうしたものかねえ。」

、全てあの人が自分で播いた種なんだから、と彼女は言った。

「うちが頼るところがなく一人で生きていくのが余りにつらくて、若い年で似た境遇の男とお見合いした。人が誠実で、それだけでいいと思った。今日まで無我夢中で生きてきたが、うちがあの主人から何かもらつたというものはない。誕生日にパン一つ、バラ一本、優しい言葉一つももらつたことがない。他の人たちもみんなそうなんだと思つて暮らしてきたのだけれど、ここまですべて生きてみたら、それは違う。うちは愛されなくて生きてきた。うちだけがのように生き、他の人たちはそのように生きていかなかったんだ。今やっとそれを知つて、腹が立っている。あの顔を見るたびに、うちは頭にくるのよ。」

ジエヒの父親が濡れたタオルで手首を縛り、脇目も振らずに道を歩き始めた。あれを見て、ジエヒの母親が無表情に言った。

「一人で行くの、うちらを置いて。あれを見て。」

ジエヒの母親は西の方にある希少植物館に行くつもりだったのだが、その前に食事する場所を探そう、と言つた。ジエヒの父親が、もうご飯にするのか、と言つと、母親は、ご飯を食べないで、この樹木園を回る力が出るのか、ときつい調子で言つた。私はジエヒの横で歩きながら周囲

を見回し、ゴザを広げるだけの空間を探した。道はアスファルトで舗装され、碎石が敷かれた部分もあるにはあったが、ゴザを敷くには狭かった。道の両側は立ち入り禁止の花壇と野外植物園だった。結局ゴザを敷けるような空間はなかった。シダ植物とシヤクヤクが群生する区間を過ぎると、熱帯植物の研究センターが見えてきて、何人かが見学していた。ジェヒの母親はドーム温室の中に入ろうとしたが、入場が可能な時間が別途決められており、入れなかった。温室の透明なガラス壁を通して、広い葉っぱの熱帯植物が見えた。温室から出てきている水路はポケットの形をした池につながっていた。ススキとパピルスの上に蓮の実が出てきており、褐色のトンボが水面と空の間を飛び回っていた。水はぬるま湯のように見えた。

座るのに適当な場所がなく、あちこちと移動した。影のない所は放射熱がすごくて、ただ歩くだけでも息が詰まった。でこぼこ道や坂道ではカーブが傾き、その度に荷物が抜け落ち、崩れ落ちた。ジェヒはさつきよりも多くの汗を流し、ひどくびっこを引いていた。大丈夫だ、と言うが、大丈夫とは見えなかった。内側のくるぶしに濃い赤紫色の小さいあざができていた。獣の爪に引っ掻かれたか牙で噛まれたように見えるほどで、その足では十分に地面を踏むことが出来なかった。骨に問題が起きたのではないかと聞くと、ジェヒは首を振った。カーブは私が引つ張ってあげようと言ってもジェヒは言うことを聞かず、それからは返事もせず汗ばかり流して黙々と歩いた。

煉瓦が敷かれている分かれ道でジェヒの両親は、右側の坂道を上がってみよう、と言った。そ

の时分には見学者たちがかなり増えており、彼らは右側の道を選んだ。きれいな土でできた険しい坂は尾根で右側に曲がっていた。傾斜が急だった。この坂を登りきった所に何かあるのかは、もちろん見えなかつた。多くの人がその道を行くし、車が上った痕跡もあつた。あそこに何かあるみたいだから、うちらもそっちに行つてみよう、とジェヒの母親が言った。カートに載せた荷物がこぼれ落ちた。ジェヒは坂道で膝をついて荷物を積み直し、ゴム紐をぴんときつく張つた。坂を上り下りする人たちが、ジェヒと私を避けて横を通り過ぎて行つた。ジェヒの両親は荷物を積み直している私たちには知らん顔をして、前を進んだ。

坂の途中で桂の並木があつた。その右側は削り出した山の斜面で、左側はちよろちよろとした水が流れる溪谷だつた。溪谷を見下ろしながら上がる坂道だつた。上がつて行くほどに溪谷との落差が大きくなつた。溪谷には大きな転石が多く、また木の幹には相当高い位置にまで土がくっ付いていた。雨の時にかなり激しい勢いで氾濫して水位が高くなるようだつた。

ジェヒの母親がふと立ち止まると、溪谷に下りて行つてみたい、と言ひ出し、これに父親が同意した。川の水があるから、その水の横に場所を取つてご飯を食べようというのだった。

その言葉を聞くや、ジェヒの父親が桂の並木の間に立つた。彼の足を踏み入れた場所にはちよつとした落差があつた。彼は老婦人が降りやすいように岩をどけ、太い木の枝を集めて束ね、ステップを作り始めた。

私は慌てた。

「ここは……ダメじゃないのですか？そんなことをしては、ダメじゃないですか？」一人呟きながら、いても立ってもおられなかった。あそこに座ればいいというが、私の目には座るだけの広さがなかった。濡れた土が付いたままだし、だらりと垂れ下がる木々は陰気に見え、日は差し込まなかった。岩の上には大雨で浸かった時に堆積した葉っぱが腐ってくっ付いていた。

私はそこに降りて行くのが嫌だった。そうしてはいけない公共の場所だという道徳も働いたのだが、何よりも直感的にその場所が嫌だった。私はそこで何か動物が悲惨に死んだ所だと思った。そんなことはないという理屈はなかった。樹木園ではあるが、本来は自然の林なのだから。涙が出るくらいに行きたくなくて、他の所を探そうと言った。ジェヒが私を助けてくれると思って振り返ると、ジェヒはカートに寄りかかり、諦めたように溪谷を見下ろしていた。

溪谷の地面は湿っており、植物の腐敗臭で空気が充満していた。

ジェヒが濡れた岩の上にゴザを二枚敷くと、ジェヒの母親が弁当を広げた。溪谷の方から見ると、そこは溪谷ではなく水路だった。コンクリートで崖の斜面が覆われていて、人の頭のぐらいの大きさの排水孔も何ヶ所か見えた。谷の底に堆積した岩々には黄色い縞模様走り、水が流れていた。ジェヒの父親は岩に縮こまって座り、その水で手と顔を洗い、首を拭き、靴下を脱いで足を洗った。飲んでもいい水だからといって口もすすいだ。ジェヒの母親は二つの水筒に水を入れた。他の見学者たちが私たちを見下ろしながら坂を上がっていた。九歳ぐらいに見える男の子

一人が、ジェヒの父親が木の枝で作ったステップに足を乗せて坂を下りようとしたが、母親と思われる女性に叱られて元が上がって行つた。ジェヒの両親は私がすねたと思つたのか、なだめようとして頻りに食べ物を勧めた。私は坂を背にして座り、それを少しづつ食べた。餃子のような具を中に入れたおにぎり、野菜入りの海苔巻、卵サンドイッチやソーセージ、海老の天ぷら、チーズ、トマト、きれいに切つたオレンジ、スイカ、よく洗つたブドウ、朝早くから一生懸命に準備した弁当であることは分かるのだが、味は少しも感じなかつた。喉が詰まり、食べ物で喉を通らなかつた。本来このような所に遊びに来ると、こんな水辺でご飯を食べるのが一番だと大らかに食べ物を渡したり、言葉をかけるジェヒの両親も次第に口を閉ざすようになった。ジェヒはほとんど食べなかつた。顔が青ざめ、母親がおにぎりを差し出すと頷いて、すぐに食べるから、と言つた。何も言えないという表情で自分の両親を見詰めていたが、ジェヒのそんな表情に私は心を痛めた。それはどれほど奇妙な光景だったか。普通はやらないような所に場所を取つてご飯を食べる老夫婦と、それを横で憂鬱そうに見る若い男、そして彼らに背を向けて座る女。

坂の下の方から原動機の音が聞こえてきた。ヘルメットを被つた男が現れ、桂の並木の間に原動機を止めて、私たちをじつと見下ろした。彼がこの区域の管理人のようだった。他の見学者の誰かが通報したのかも知れない。彼はジェヒの父親を、おじさん、と呼んだ。ここは国立公園で、ここでこんなことをしては駄目です、と彼は言つた。ジェヒの父親は、分かつた。これだけ食べて上がるから、と言つて、彼に向つてにつこり笑つた。管理人は何の返事もせず、また了解した

という表情もせず、じつとこちらを見ていたが、結局坂を上がって行ってしまった。

食後のデザートは誰も食べようとしなかった。スイカ半玉はそのまま元のアイスボックスに入れられ、半分以上残った弁当も元の重箱に積み重ねられた。生臭い水の臭いが染み込んだゴザの表面には、濡れた砂がくっ付いていた。私はジェヒがそれを畳んでカートに載せるのを手伝った。ジェヒの母親は元の坂に上がって戻ろうと、木の束のステップに足をかけた時に踏み外した。坂を下りながら私たちを見ていた人たちが驚いて声をあげた。ジェヒが後ろに立っていて、母親の体をうまく掴まなかつたら、母親が溪谷の底に堆積している角ばった岩に向かつて転がっていったらう。先に坂に上がっていたジェヒの父親が、大笑いしながら母親の右腕を掴んで上に引つ張り上げた。母親は短い悲鳴を上げた後、右腕が痛いのに、そんなに無理に引つ張ってどうするの、と言った。そう言いながら彼女は笑った。父親も笑った。私たちがいい人であり、誰にも悪意がないということを見せてやっていたための笑いのようだった。そして戻った坂で笑いが段々と消えていくのを私は奇妙な心情で見ている。ジェヒの母親は痛みを耐えているかのように目をぐつと閉じたまま、肩をかばっていた。

ジェヒの両親はもう坂の上に行くのを断念し、近くにある植物園を遠目でも見ようと言った。疲れて歩く意欲もなくなつたように見え、ゆっくり移動した。私は先に行つて、坂を下りきつた所でさつきは見ていなかった案内板を見た。「猛禽類の禽舎」と書かれた案内板が矢印で、坂の上を指し示していた。その案内板の前でちよつとの間立ち、遅れて来るみんなを待った。そしてジ

エヒ家族たちと合流した時、

「上の方に猛禽類の鳥小屋があるんだって」と私は言った。「糞尿なのよ。」

「あの谷の水は、鳥の糞尿だということなのよ。」

\*

私はかなり以前にジェヒと別れた。樹木園のハイキングがあつて二年ぐらい経った時点のことだった。別れる時にどんな話を交わしたのか、覚えていない。どんなことが契機になつて別れるようになったのかも、今は記憶にない。何故なんだろうか？あの日のハイキングのことは、このように覚えているのに。

樹木園の出口からは、ジェヒの両親は来た時よりもっと離れて歩いていった。母親はポケットからイアホンを取り出して耳に差して、歌を歌っていた。愛も梅のように季節の盛りがある。盛りがあるのよ、という歌を。ジェヒは可哀そうに見えた。話しかけても返事はなく、私の方を見ようとしなかった。樹木園を出発して家に帰る道は、工事中だった。両側が削られて地肌が出ている道路を走って行くと、山に方にちよつと入り込んだ場所で桃を売る露店を見つけた。ジェヒの家族がほこりだらけの露店で桃の価格交渉をしている間、私は手のストレッチをしながら車の中に残っていた。車に戻ってきたジェヒの母親は、私の膝の上に小さな箱を置いた。イチジク

だった。ほんのりと赤く口が開いたもので、八個が入っていた。いつだったか夏に私がイチジクを美味しそうに食べていたからといって、家に帰って食べる、と母親は言った。今でも時おり思うことがある。

あの時、私の方がジェヒの両親に同調して喜んであの坂を下り、溪谷の地面に自ら進んでゴザを敷いたとしたら、どうだったか。それがみんなにとって良くなかったか。それが正しくことではなかったのか。

私は今、他の人と暮らしている。ジェヒより背が高く、顔が黒く、指が太い人で、その彼には兄弟がいない。彼の両親は車で二時間かかる距離の小都市で暮らしていて、二・三ヶ月に一回ぐらい、私は彼と一緒にその家を訪問し、そこでご飯を食べて帰る。彼は私に親切で、私も彼に親切にしてあげる。しかし思いもよらないある瞬間に、例えばテレビを見ていて彼が笑って私が笑わない時とか、彼が運転する車の助手席に座っていて道路が目の前に荒波のように迫って来る感じになった時、どうしてこの人なのかを一生懸命考えるのだった。

どうしてジェヒではないのか。

そんな時は、捨てられた、という思いに苦しめられる。ジェヒとその家族に。無愛想に見えて多少疲れるが、優しい人たちに。

最近私は、テレビで偶然にあの樹木園を見た。私と暮らしている人は樹木園の規模の大きさに感嘆し、そこに行ってみたい、と言った。私はあの時ジェヒの後ろをとぼとぼ歩いた並木道をぼ



うっと思い出しながらテレビを見ていて、私はそこに行ったことがある、と答えた。彼はいつ誰と行ったのかと問うような目で私を見たが、それ以上は何も言わなかった。

私はあの日のハイキングのことについて、言うべきことを言っただけだったと思っている。それはみんなを当惑させ悲しくさせたのは、私ではないということだ。